

巻頭言

日本農学アカデミー会長に再任されて

鈴木 昭憲

日本農学アカデミー会長・東京大学名誉教授

7月の総会において会長に再任されましたが、再度会長を務めるにあたり、日本農学アカデミーの当面する課題について考えて見ました。

会則の定めるところによれば、本会の目的は、農学の領域において指導的役割を果たし、もって我が国及び世界の農学の発展に寄与することにあります。そして、その目的を達成するため、日本学術会議及び農学関連学協会等との連携を図りながら、現代社会が直面する農学に関する基本的諸問題とその解決に資する方策の調査研究、農学に関する情報交換・啓蒙活動等に関する事業を行うことが期待されています。前期における活動が、それらの点において充分であったかと考えると、再度会長をお引き受けすることに、内心忸怩たるものがあります。しかしながら総会で指名を頂いた以上は、最善を尽くしていきたいと考えております。本会において、取り組むべき課題等について、会員のみなさまから、積極的な発言を頂きたいと思っております。

本アカデミーが連携して行くべき農学系の学協会としては、第一に日本農学会、(財)農学会があげられます。日本農学会は、わが国の農学に関する専門学会の連合協力により、農学およびその技術の進歩発達に貢献することを目的としております。他方、(財)農学会は、明治20年に創立された農学会を前身とし、昭和7年2月2日付をもって主務官庁より認可され現在に至る長い歴史を有する組織であり、農事に関する学術の研究を奨励し、農業の改良発達を図ることを目的としております。日本農学アカデミー、日本農学会、(財)農学会の農学系三団体は、それぞれ組織形態は異なるものの、農学の進歩発展に

資する目的としては共通しております。ところで、現在、公益法人制度見直しがすすむなかで、学協会組織のあり方についても各方面で検討が進められております。学協会の役割としても、国際基準での活動がもたれられつつあり、各学協会がそれに耐えられるかが問われております。比較的に小規模の学会が多い農学関係の学会における組織強化は、農学分野において大きな課題であります。日本農学アカデミーとしても、他の農学系2団体と協力し、農学系学協会の強化につとめるときではないかと思っております。会員各位からの、積極的な発言を期待します。

また、本アカデミー創設の基盤であった、日本学術会議は皆様ご存じの通り、本アカデミー発足当時とは、組織形態がことなり各学協会との結びつきは、以前に比べ希薄となっております。この点も、本アカデミーの組織問題として考えて参りたいと思っております。

以上、会長再任にあたり、本アカデミーが当面する組織問題について感想を述べさせていただきました。会員各位の御支援とご協力をお願いいたします。